

## 2019年1月NHK九州沖縄地方放送番組審議会

1月のNHK九州沖縄地方放送番組審議会は、17日（木）、NHK福岡放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、事前に視聴した、事件の涙「そして、研究棟の一室で～九州大学ある研究者の死～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、2月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

### （出席委員）

委員長	明石 良	（宮崎大学 副学長）
副委員長	山口 成美	（（有）シュシュ 代表取締役）
委員	秋本 順子	（金属造形作家）
	大鋸 あゆり	（伊万里ケーブルテレビジョン（株）取締役放送部長）
	籠田 淳子	（（有）ゼムケンサービス代表取締役）
	田川 大介	（（株）西日本新聞社編集局総務）
	富田 めぐみ	（琉球芸能大使館代表）
	長崎 健一	（（株）長崎書店 代表取締役社長）
	森 重隆	（九州ラグビーフットボール協会 会長）
	山元 紀子	（霧島高原ビール（株） 代表取締役）

### （主な発言）

<事件の涙「そして、研究棟の一室で～九州大学 ある研究者の死～」

（総合 12月28日（金）放送）について>

○ 「事件の涙」は12月27日（木）の「死にたいと言った父へ～西部邁 自殺ほう助事件～」（総合 後 10:45～11:10）も見ていたため、かなり重たい内容という印象があった。インターネットで調べると番組を見て考えさせられたという声が多かったが、今回の番組は、見る人の立場によって捉え方が違ったのではないかと思う。

今回の事件は、Kさんが非常勤講師であったがために起きてしまったように語られていた。非常勤講師の立場が現実問題として厳しいものであることは確かだが、一方で非常勤講師だからこそ、むしろ非常勤講師にしかできないこともあるのではないかと思う。

番組冒頭では、Kさんから送り返された靴が事件の前日に知り合いの元に届いた

と言っていたが、番組の最後では、事件の6時間後に届いたと言っており違和感があった。私の捉え違いかもしれないが、「事件の涙」というタイトルから、現実起きたことを多少無理して事件化しようとしたのではないかと感じた。Kさんの本当の姿をもう少し淡々と捉えてもよかったと思う。

(NHK側)

Kさんが靴を送り出したのが事件の前日の行動で、実際に知り合いの元に届いたのが事件の6時間後だったと思うが、混乱を招くような言い方だったかもしれない。番組のフォーマット上、「事件の陰には涙がある」というキーフレーズを入れることが決まっているので最後に入れたが、そこに違和感を覚える人と、すんなりと入っていく人とがいて、制作する上で悩んだところでもあった。

- いわゆる大事件ではなく、時代を象徴する事件であり、それを最後まで丁寧に取材しているという印象を受けた。Kさんが亡くなるまでの足取りを最後まで取材することで、当事者たちの心境の一端に迫ることが出来る、胸を打つ番組になっていた。事件の背景には、国立大学が独立法人化され、大学の運営も変わり、院生長屋のような場所を黙認することが出来ないような状況に置かれていることや、正規雇用と非正規雇用の問題、雇い止め、非常勤講師、貸与型の奨学金など数多くの根深い問題があり、これらのことに思いをいたすことが出来る番組だった。

ただ、番組の終わり方が情緒的になっており、見た人が「ああ、かわいそうに。なんとかならなかつたのか」といった感想に終始してしまうのではないかと気になった。自殺の問題を一個人の問題と捉えるのではなく、もう一步視点を広げて、現代の社会が抱える課題にも目を向けられるような構成になっていればなおよかったと思う。

- 繰り返し見ても気が重くなるような内容だったが、この事件を取り上げて取材し、事件の背景に潜んでいる日本の問題を世に問うたことをまずは評価すべきだと思う。Kさんは亡くなっているので、なぜあの場所で自ら命を絶たなければならなかつたのか、真意を問うことはできないが、残された写真や手紙、関係者の証言などからKさんの人物像や境遇が浮かび上がってきた。すべてを説明するのではなく、関係者たちが語る小さなエピソードを積み重ねて、亡くなるまでの描写を引き出し、視聴者が考えることに委ねて番組が作られていると感じた。

時系列で番組を構成していたが、そこから強く感じたことは、本人は人一倍努力をしたが、それでも生活が安定せず困窮していく、個人の問題だけではなくそんな

らざるを得なかったということだ。Kさんと同じような境遇の人が、「こういう道を選んだことを、自己責任といわれるかもしれない」と発言していたのが印象的でとても重く感じた。今や教職に限らず、さまざまな分野で非正規雇用が広がっているが、本人の努力不足という問題ではなく、その選択肢を選ばざるを得なかったという人が増えているのではないかと思った。

番組の冒頭で、Kさんが通っていた整骨院の人が、Kさんに靴をプレゼントするやりとりが紹介されていたが、客に靴を贈るという行為は、よほど親しくなければ行わないと思う。いったいどんな気持ちでKさんと整骨院の人がやりとりをしていたのかと思うと胸が苦しくなった。また、このエピソードが番組の冒頭で紹介されていたが、視聴者がいろいろと背景を知った後半で紹介したほうが、より視聴者に伝わったのではないかと思った。

社会の格差が広がる中で、弱者が悲鳴をあげても届かず、かき消されることが多い今、聞こえない声や届かない叫びにきちんと耳をすませて拾い上げ、拡声機となり届けるべきところへ届けるという役割がメディアにはあることを感じた番組だった。

- 没頭して番組を見ることができた。亡くなる前の足取りを見ると、なんともいたたまれない気持ちになった。特に、研究にいそしんだ院生長屋で、目張りなどしっかりと準備をして亡くなっていったときの心境に思いをはせると、胸に迫るものがあった。

国の方針で院生が増えたが正規の研究者のポストは限定されていて、雇用の受け皿として非常勤講師が激増していることなどについては、数字やグラフなどがあつた方が分かりやすかったのではないかと思った。ただ、あまり説明が多くならないほうがこの番組の趣旨にあっているようにも感じた。

Kさんはとてもまじめで優秀な人だったと思うが、Kさんから恩師に送られたメールの文面から、掛け持ちしていた非常勤の仕事一つが雇い止めになったり、40代に入って健康を害したりなど、一つ一つ収入や健康などを損なっていかなざるを得ない現実の厳しさをひしひしと感じた。

Kさんが作っていた授業のプリントなどを見ると、若い学生たちにも興味を持ってもらおうとしている工夫がよく分かった。さまざまな人の話を紹介していたが、Kさんから学んだ学生の声も聞いてみたかった。

冒頭のナレーションで「九州で起こった小さな事件でした」の「小さな事件」という表現が適切だったか気になった。火災を指して「小さな」と言っているのか、Kさんが亡くなったことも含めて「小さな」と言っているのか、見る人によっては違和感を与える場合もあると感じた。また、遺書は残されていなかったのか、家族との関係性ややりとりなども知りたかった。

エンディング曲も静かで、悲しい番組ではあるものの、見終わってからしんみりとした気持ちになれた。特に最後に、京都のKさんの実家で母親が「お疲れさまでした」と声をかけるシーンは心に深く残った。とても見応えのある番組だったと思う。

- この事件については新聞で報道されていたので知っていたが、番組を見ることで自殺の背景や国策によって生じている院生の切ない実態がよく分かった。

顔を出して話すには難しいテーマだったと思うが、整骨院の人やラーメン屋の店員、先輩の教授や九大の名誉教授など、顔を隠すことなくインタビューに応じており、院生の実態を知ってほしい、Kさんの死を無駄にしたくないという思いの表れだったのだと感じた。事件の裏にある問題を我々に問いかけるには十分なものだったと思う。

一方で、Kさんがなぜ生活の立て直しを考えることが出来ずに亡くなってしまったのか、法律の知識を生かした別の道を歩むことはできなかったのかという疑問が自然と浮かんできた。また、国策の転換で院生が急増したが受け皿がないことなど業界では周知の事実だったはずだが、指導者たちはそういうことを踏まえて将来を見据えた指導をしていなかったのか、自殺する前にあれだけのSOSが出ていたのにどこまで共有されていたのかということも知りたかった。自殺したKさんを救うにはどういう手立てが考えられたのかということまで追求出来ていればなお視聴者に伝わったと思う。

いずれにしても、こうした問題を世間に知らせることで世論が動いて国策を変えていくという流れが理想的だと思うので、数十秒の日々のニュースの中では伝えられない事件の裏側をこれからも伝えてほしいと思う。

- 孤独で壮絶な最期だったと思うが、亡くなる直前まで地域の人との温かいつながりがあったことを知り少し安どした。学ぶことと生きることは直結しているからこそ、人は死ぬまで成長したいと願うのではないかと感じている。しかしこの番組を見て、学ぶにも生きるにもお金が必要だが、学ぶこととお金は直結していない、そういう社会というものを改めて感じた。

何が悪かったのか、なぜ亡くなったのかという気持ちになった。九大のキャンパス移転、合法的に研究室を利用していない状況も含め、Kさんは心も体も動かしていくことが難しかったのではないかと番組を見終わって感じた。

- リアルタイムで番組を視聴したが、見るのがとてもつらく、こんな死に方があるのかと驚いた。こうした事件がなぜ起きたのか自分なりに考えたとき、よき大人がそばにいなかったからではないか、よき大人がそばにいれば、今回のような事件は起きなかったのではないかと思う。

この番組は、年末も押し迫った12月28日の夜に放送されたこともあり、とても暗い気持ちで見た。正月を迎えるこの時期に放送するにはどうかと感じた。日曜日の昼ごろの時間帯の方がもう少し見やすいのではないかと思う。

- 移転前の九大のキャンパスで火災があったことは何となく覚えていた。自殺した方は自分の研究に没頭しすぎて追い詰められ死を選んだのかと思っていたが、実際には社会的背景に大きな問題があることがわかった。社会的な問題について、具体的に示すのではなく、複雑に交差している問題が多くあることを視聴者に気づかせるような作りになっていたので、逆に重く感じたのかもしれない。

会社の同僚たちと一緒に見たが、見終わった後、奨学金制度に問題があるのではないか、自分たちの住む自治体には大学を出た後に地元企業に就職すると奨学金を市が免除する制度があるが、そういう生き方も出来たのではないかと提案する人もおり、多くの人に考えさせるきっかけを与えるよい番組だと思った。ただ、靴を送るエピソードの部分は、若干ドラマチックに描きすぎている感じがした。

私たちを取り巻く環境は変化しているが、それらが複雑に影響してさまざまな問題を生み出しているのかと思う。

- Kさんは家庭の事情でやむなく自衛隊の工科学校へ行き、そこでいじめなどにも遭ったと言われていたが、そこで使われた自衛隊時代の2枚の写真を見ると、自衛隊が悪者に見えるような印象を持った。

しっかりとした夢や目標を持っていても、さまざまな事情でそれがかなわずつらい思いをすることもある。そんなときに相談できる人が周りにいることの大切さを改めて感じた。Kさんが研究に専念できず、博士論文も出せないままに退学することになったとき、次なる目標や、別の道をアドバイスしてくれる大学教授はいなかったのか、残念でならない。

今の若い人たちには、責任を持った仕事をしたくないという理由で、正規ではなく自ら望んで非正規雇用として、フリーターの延長のような働き方を希望する人もいと聞く。一方で非正規雇用では生活も安定しない問題がある。ほかの業界にも通じるこういった非正規雇用の問題点など、考えさせられることの多い番組だった。

- 事件の真相を追求したいのか、そこにある問題を明らかにしたいのか、制作者の意図がよく分からなかった。

今回の事件には、大学の側面からと本人の側面からの見方があると思う。大学の側面からすると、指導教員が学生のケアをどのくらいおこなってきたのかという点は大きいと思う。本人の側面としては、社会人から大学院に進み、年齢も上がり大量の論文を求められる不安な状況だったということだ。奨学金に関しては以前と比べ

て改善されてきており、今の学生は十分にやっつけていける。これらのことを今回の番組に入れることは難しかったのだと思うが、現在の大学の運営や奨学金の実態に詳しい人からすると、今回の事件を見たときに実際とのギャップを感じた人もいると思う。

大学に放火する状況にまで追い込まれていた背景、大学側の指導状況や責任など、すべてをこの番組の中に入れていくことは難しいと思うが、今後、同様の番組を制作するには、今の大学の現状も含めて、どういう立場で番組を制作していくかということを確認にしていくと良いと思う。

(NHK側)

いろいろな角度から指摘を頂いた。自己責任なのか、社会のせいなのかということは、取材の中でもかなり議論を重ねたが、一つのストーリーの中では描き切れない部分もあった。実際には、Kさんは他の仕事を薦められていたことが分かり、不器用ゆえに選べなかった道があったことや、社会の純粋な犠牲者とも言えない部分もあったように感じる。

情報番組であれば、データも含めて何が問題なのかをもっとはっきりと情報として描いていくが、今回は人間ドラマに寄せていくという番組のスタイルだったため、情緒的に描く部分と、問題をきちんと取材して描く部分のバランスが難しかった。

いろいろな問題が凝縮して背景にはあった。これからも多くの視聴者に考えるべき課題を番組にして伝え続けていきたい。

(NHK側)

第一報をニュースで知ったとき、何か背景にありそうだと感じていたが、今回このタイミングでこうして放送が出来るまでに継続取材することが出来た。こういう問題があるのではないかと議題を提示するところまでは出来ても、今後どうするかといった解決策までをこの番組の中で展開するのはなかなか難しく、今後の課題として残ったように感じる。今回頂いた意見を受けて、引き続き問題意識を持って番組を制作していきたい。

<放送番組一般について>

○ 「チョコちゃんに叱られる！」の人気の理由を考えると、まず流行語になりそう

なインパクトのあることばがちりばめられていることがあると思う。子どもが大人に普通に話しかける際に使いそうだが、NHKでは使いそうもないことばやフレーズで新鮮だと思う。また、解答がないようなことでも、真剣に考えさせていくプロセスも非常におもしろいと思っている。

12月7日(金)のチョコちゃんに叱られる! 「“三本締め”って何?」では、全国の三本締めについて紹介しており、自分の地元のものも取り上げられてとてもうれしかった。後日、地元の祭りに参加した際、番組で取り上げられたことを話すと、周りの人たちも知っていて、その話題で盛り上がった。また、地元の三本締めの後に紹介された名古屋のナモ締めも大変ユニークな三本締めだった。確かにちょっと変わっているが、地元ではあまりその価値に気づいていない事柄が多くあり、そういった知らないことを知る楽しさがある番組だと感じた。

1月11日(金)のチョコちゃんに叱られる! 「なぜお餅は関東が四角で関西が丸なの?ほか」では、前週1月4日(金)の「大河ドラマ“いだてん”とコラボスペシャル」(総合 後7:30~8:42)の際に宿題として出された内容を取り上げていて、連続ドラマのように週をまたいで内容が続いていくところもおもしろいと感じた。

「チョコちゃんに叱られる!」のもう一つの人気の理由として、祖父母に子どもの面倒を見てもらいながら働く人が多い中で、子どもたちも祖父母も一緒になって楽しめるという点も大きいと感じている。いろいろな世代が同じ番組を見て共感して笑える番組は大事だと思った。

- 12月16日(日)の大河ドラマ 西郷どん「敬天愛人」(総合 後8:00~8:58)を、パブリックビューイングに参加して見た。会場にいた約2,000人が一斉にすすり泣く様子は圧巻で、来場していた主演の鈴木亮平さんも、クランクアップしたときは泣かなかったが、さすがに鹿児島に来て泣いてしまったと言っていた。パブリックビューイングは、視聴者とのつながりを強くするイベントだと思った。

12月31日(月)の「第69回NHK紅白歌合戦」を見た。ふだんは家族の中でチャンネルの奪い合いになるが、今回は平成最後の紅白ということで、最初から最後までじっくりと見ることが出来た。チョコちゃんやおげんさんなどの人気キャラクターに加え、孫たちが好んで見ているEテレの「いないいないばあ」のキャラクターが出てきたりと、客層を広く捉えながら、最後にサザンオールスターズが出てくるという演出で、ハラハラドキドキ感を味わうことが出来た。今回の紅白は、歌というよりも、ダンスやショータイムなど、ステージ性に重きを置いて制作されたことがよく伝わってきた。1点だけ、気になったのは、若い俳優の司会があまりに未熟で、見ているこちらが心配になったことだ。次からは安心して見られるような司会者の起用をお願いしたい。

- 「NHK紅白歌合戦」を見た。サザンオールスターズと松任谷由実さんの掛け合いはとても珍しい光景で見応えがあった。全体的に若者から年配の人まで楽しめるような番組構成になっていたと思う。
- 1月2日(水)のブラタモリ×鶴瓶の家族に乾杯 新春SP「太宰府天満宮」(総合後7:20~8:48)を見た。太宰府天満宮の成り立ちや裏側を、おもしろおかしく、そして分かりやすく伝えていた。これまで何度も行ったことがある場所だが、境内にある池や川を渡ること、身を清める意味があることや、拡張工事の際に樹齢1,500年のくすの木を保護しながら行ったことなど、今回新たに知ったことも多く、また訪れた際に紹介された場所をじっくりと見てみたいと思った。
- 1月3日(木)の臨時ニュース「熊本県で震度6弱 津波の心配なし」関連 (総合後6:12~6:50)を見た。初動で必要な情報がきちんと伝えられていたと思う。やはり一番関心があるのは、犠牲者やけが人の有無、家屋の倒壊や大きな災害の有無、そして福岡を含めた九州全域の震度だ。これらの情報が過不足なく速やかに伝えられておりよかった。やはり災害報道は視聴者がNHKに最も期待するところだと思う。
- 1月6日(日)の大河ドラマ いだてん〜東京オリムピック噺(ばなし)〜(1)「夜明け前」(後8:00~8:58)を見た。オープニングがとても楽しく、大友良英さんの躍動感のあるテーマ曲と東京オリンピック当時の映像が頻繁に使われており、見ていてわくわくした。これから毎週日曜日にこの音楽が流れるたびに、2020年のオリンピックに向けての期待が膨らんでいくことだろうと想像している。

主人公の金栗四三は、日本初のオリンピックであり、熊本県の玉名出身だ。熊本地震から3年経つなかで、熊本に活気を生み出してくれるような、よいタイミングでの大河ドラマだと感じている。

日露戦争後の帝国主義の時代に、日本のオリンピック初参加を巡る議論が難航していたことを初めて知った。宮藤官九郎さんの脚本ということもあってか、ビートたけしさんや役所広司さんの演技やセリフ、動きにコミカルなものが多くて、とても楽しく見る事が出来た。

明治と昭和を行ったり来たりしていたので、少々めまぐるしい印象はあったが、ふだんの大河ドラマとは異なり、日本の近代が舞台なので、古風な言い回しなども少なく、歴史的知識が浅い人でも見やすいドラマになっているように感じた。
- 1月8日(火)と9日(水)の「いろどりOITA」を見た。「いろどりOITA」は、番組冒頭でも紹介されているが、国内外を問わず多くの人が行き交う大分県で、住む人たちの豊かな魅力を引き出す番組というコンセプトがあり、大分らしさを一生



懸命追求しようとしていると思う。8日の放送では、イノシシが年間7,500頭捕獲されるうち、ジビエとして食べられるのはたったの3%だと紹介し、「里の駅かなわ」から生中継でイノシシの蒸し料理を披露していた。ただ、その会場には誰も客がおらず、中継のアナウンサーと店長しかいなかったことがとても不思議だった。料理が出来るまでの15分間、足湯につかって待っている間もとても寂しく感じられた。これが現実なのかとも思ったが、正月明けの番組としては少し寂しく感じた。

9日の放送では、二宮圭一さんの「小さな肖像」という長寿コーナーが放送された。半年前にもこの審議会で話をしたことがあり、そのときは677回目だったが、今回で702回目の放送だった。この6か月間の間にも常に一人で市井の人にインタビューを行い、編集し、肖像画を描いて、毎回大変な努力をしていると感じた。「いろどりOITA」はニュースや中継などさまざまなコーナーで構成されているが、常に本当の大分の姿を映し出すコーナーとして「小さな肖像」が存在してくれてほっとした。今後もこのコーナーで一生懸命大分の本当の姿を見せていってほしいと思った。

- 1月11日(金)の実感ドドド!「2019年 あなたはどう生きる?」を見た。「新時代の幕開け」や「生き抜くヒントを探る」など、とても大げさな文字が画面に次々と示されるものの、出てくる方々のことばが、心に響かないものばかりで期待外れだった。「生き抜くヒントを探る」とはあまりに大げさだと感じた。年末年始のあまり時間がない中で慌てて作ったのかもしれないが、少し残念に感じた。
- 1月11日(金) 沖縄の歌と踊り「鈴木耕太の組踊入門 仇討ち物語」を見た。ことは、国立劇場沖縄の開場15周年記念と、組踊の初演から300年という、琉球芸能にとっては大切なアニバーサリーイヤーだ。今回は、沖縄県立芸術大学の鈴木耕太講師の案内で、組踊入門としていくつかのあらすじをダイジェストで紹介しつつ、しっかりと見どころを押さえていて、組踊をよく知らない人から詳しい人まで幅広く楽しめる番組となっていた。「沖縄の歌と踊り」は、NHK沖縄放送局の前身であるOHK(沖縄放送協会)時代から続く長寿番組で、沖縄県民には大変広く親しまれている。ことしで番組開始から50年となることもあり、これまで放送してきた映像のアーカイブスも貴重で、国立劇場沖縄の伝統芸能の公開講座と併せて記録映像鑑賞会が企画されている。番組という枠にとどまらず、広く沖縄の社会に貢献する番組となっている。これからもぜひ、長く続けてほしい番組の一つだ。
- 1月12日(土)の第55回全国大学ラグビー選手権 決勝 「天理」対「明治」(総合 後 2:05~4:10)を見た。ことはラグビーのワールドカップが日本で開催され、世間の関心も高まっていくなかで、NHKで生中継することは非常に意義深く

思っている。

- 1月14日(月)のBリーグ「熊本ヴォルターズ」対「香川ファイブアローズ」(総合 後1:55~4:07 熊本県域)を見た。3年前、リーグ戦の最中に熊本地震が起こり、リーグ自体が中断となってしまったシーズンもあったし、球団自体も債務超過で球団の存亡すら危うい時期や、選手が一時期5名になるまで流出してしまったことなど、数々の危機を乗り越えてきた。そして今では西地区2位につけて、熊本のファンが一体となって、今度こそB1に昇格という盛り上がりを見せている。今回は生で試合を観戦したが、中継も録画して見た。ふだん、バスケットボールの中継を見る機会がないので、どのような実況や解説をするのか気になっていたが、思っていた以上に実況アナウンサーが、選手についてしっかりと調べており、的確な実況、わかりやすい解説のおかげで、試合を楽しんで見る事が出来た。熊本には他にもJ3のプロサッカーチームがあるが、B1昇格を狙う熊本ヴォルターズが県民の注目を集めているところなので、こうした中継の機会を増やして、熊本ヴォルターズのB1昇格を追ってほしいと思った。
- 1月14日(月)のプロフェッショナル 仕事の流儀「皿を割れ、ふるさとのために〜地方公務員・くまモン〜」(総合 後10:00~10:44)を見た。行政は守りの姿勢に入り、仕事を増やさないようにしているというイメージが強かったが、熊本県が本当に地域を売り出していこうとしている必死さを感じた。特に蒲島郁夫熊本県知事の「責任は私が取る」というコメントも、まさに理想の上司のことばだと感じた。海外にも積極的に発信していく戦略で、くまモンのキャラクターを海外でも無料で使用してよいとしたときは、賛否両論あったようだが、心を広く持って全世界にPRするのだという、熊本県と知事の考え方が見事に的中したことが番組を通してよく分かった。行政から学ぶことはあまりないと思っていたが、熊本県の取り組みから学ぶことが多くあった。当時のブランド推進課長は女性だったが、ブランド自体の確立が難しいなかで、女性ならではの視点を上手に取り入れていったのだと思った。また、化粧品会社とのコラボで商品開発をする話題など、くまモンがトップセールスを行いながら熊本をPRする様子が紹介され、全国に元気を与える非常によい番組だった。
- 1月16日(水)のクローズアップ現代+「日本一監督の“イマドキ若者”育成術〜明大ラグビー部 勝者の組織〜」を見た。明治大学の監督に密着取材していた。番組自体はとてもよかったが、スタジオコメンテーターの人選に疑問を持った。タイトルが「若者育成術」とあるからかもしれないが、今回のテーマは勝ってみんなで喜ぶことにどれだけの価値があるのかといったテーマで人選をしたほうがよかったと

思った。

- プレマップ ドラマPR 「NHKにゾンビドラマなんて、できるかな」を見た。子どもの頃夢中になって見た「できるかな」のノッポさんとゴン太くんが登場していて、とても感激した。久しぶりに見たノッポさんは、おそらく80歳を超えていると思うが、踊りも軽やかでとても元気そうだった。久しぶりにノッポさんが見られたことだけでもうれしかったが、大人になり年を取っても、物づくりは楽しいのだということを伝えるような、わくわくする番組を、今度は大人向けに年に1回でも放送してほしい。

- 1月16日(水)のハートネットTV シリーズ 闇に埋もれた真実は 第2回 「消された精神障害者～沖縄の私宅監置～」を見た。私宅監置ということばを初めて知り、その実態にただただ驚くばかりだった。当時の監禁の写真を手がかりに、とても丁寧な取材がなされており、何年も隔離されていた障害者の表情や痩せ細った体など、映像の訴える力はとても強く、1900年代当時の様子がよく伝わったと思う。

担当ディレクターが撮影も行い、関連した写真展の開催にも関わっている様子を番組のなかで上手に織り込んでいた。ただ番組を作るだけではなく、取材対象と共に社会へその問題を知らしめる活動が大切なのは分かるが、当事者に長年寄り添う気持ちがないとなかなか継続することは難しい。この番組のディレクターが2011年に写真の存在を知ってから継続的に取材してきた点に、その思いの強さをかいま見た気がする。

私宅監置が行われていた小屋の保存活動が沖縄で起こっているようだ。ぜひ、一棟だけでも残してもらい、二度とこうした人道を無視した隔離が行われないように伝えていってほしいと感じた。

番組では当時のことを伝えるところで終わっていたが、今はどうなっているのかが気になった。私宅監置から大阪で起きた自宅監禁の事件を思い出した。いまだに親が精神疾患を患った子どもを監禁したり、病院でも精神疾患の患者を隔離したり拘束したりする事を聞くので、衛生面は改善されたかもしれないが、そういった隔離や拘束は続いているのが現状なのではないかと感じた。

精神障害者の方とどう接するべきか自分自身も理解できないところが多く、少しでも理解が広がるような番組が発信されるとよいと思う。国が決めた法律も、内容を知らないとおかしいと思うこともできない。多くの人がそういった学びを深め、社会を変える力になるような番組制作を今後も期待する。

- 1月2日(水)の「平成万葉集」(BSプレミアム 後9:00~10:29)を見た。平成という30年間で、一般の視聴者による和歌を中心にしたとどる番組で、映像も凝っていて美

しくとても見応えがあった。生田斗真さんと吉岡里帆さんという、今をときめく若い俳優二人が和歌を詠むというところも意外だったが、逆にじっくり来ていて、新春にふさわしい、みずみずしい番組だった。東日本大震災で家を失った10代の女性や、自分の生き方そのものに迷っている男性、オスプレイが飛び交う沖縄のサトウキビ畑で汗を流す男性など、市井の人たちの日々の姿を静かに、その背景も映しながら、作品をじっくりと味わうことが出来た。正月に時代や自分の生き方を顧みる上で、日本古来の文学の和歌が持つことばの力を改めて感じるとともに、こういう良質な番組をさりげなく編成出来るところがNHKの底力なのだと感銘を受けた。

- 1月8日(火)のアナザーストーリーズ 運命の分岐点・選「ロサンゼルス暴動□その時…～炎上する街に響いた奇跡のスピーチ～」を見た。番組では、ロサンゼルス暴動がなぜ起きたのかというきっかけと、エスカレートしていく部分、そして終結する部分の3点で描かれていたが、当時、ロサンゼルスで暮らしており事件を詳しく知る者としては、暴動と略奪という2つの側面から描いてほしかった。暴動については、よくここまで情報を集めたと感心するくらい紹介されていたが、略奪については、その背景も含めて現在の国際情勢などからさすがにそのまま伝えることは難しかったようだが、そういった最も激しい部分についても踏み込んでいけばもっと興味深い番組になっていたと思う。暴動だけに限って見ると、うまくまとめられていたと思う。

NHKは歴史をうまく伝える生き証人であり、それを組織的に行っている団体だと感じている。国民に対して、現在、過去、未来をきちんと伝えていくことが一つの役目だと思う。そのためには過去の歴史をしっかりと検証すること、そしてそれを分かりやすく伝えていくことが重要だ。未来に関しては、NHKが断定的に伝えていくことは難しい部分が多いと思うが、ぜひ地域の大学などと情報交換をしながら、今何が起きていてどうなっていくのかを地域から全国に発信できるよう、九州沖縄一丸となって取り組んでいってほしい。国立大学のあり方など今後もさまざまなことが変化していく。そういった情報も多角的に取材し、地域と密着した番組を制作していってほしい。

(NHK側)

日頃から我々は「地域に寄り添う」とか、「応援する」ということばを使っているが、生半可な気持ちや、通りいっぺんのやり方では通用しないことを再認識した。個々の番組で、地元を取り上げると喜んでいただける反面、取り上げるならきちんと取り上げてほしいという意見も頂いた。やはり番組を制作し、放送を出していく側として、どれくらいの気持ちを込めて地域と寄り添って

いけるのかということを中心に検証しながら、これからも取り組んでいきたい。

NHK福岡放送局  
番組審議会事務局